

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：16201
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2017～2021
 課題番号：17K13287
 研究課題名(和文) 政変後のチュニジアにおけるイスラーム過激派と世俗主義の動態に関する人類学的研究

研究課題名(英文) Anthropological Study of the Dynamics between the Islamic Extremist and Secularism in Tunisia after Arab Spring

研究代表者
 二ツ山 達朗 (FUTATSUYAMA, TATSURO)
 香川大学・経済学部・准教授

研究者番号：20795710
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、2011年の政変後のチュニジアにおける聖者廟の破壊と再建をめぐる事例を通じて、イスラーム過激派と穏健派ムスリムや世俗主義者の動態について考察することにある。新型コロナウイルス感染症の影響などで、現地データの収集・分析を用いた考察には課題が残ったものの、聖者廟破壊の事例をイスラーム地域研究や宗教人類学の先行研究の議論において考察したことで、特に理論的な研究成果をもたらすことができた。聖者廟は、一部のイスラーム過激派によって破壊されたものの、それに関する実践は、多くのムスリムにとって神の言葉をモノや場所を通じて体感的に感得する宗教実践であり、その重要性が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、ムスリムの宗教実践におけるモノや場所の重要性を、政変後のチュニジアにおいて変化しつつある聖者廟をめぐる多様な思想や実践を通して考察したことにある。現代中東地域の動態についての解明、イスラームの多様性の理解の深化につながったことのみならず、一神教研究や宗教人類学分野においても、意義深い研究成果となったといえる。

本研究の社会的意義は、イスラーム過激派と、それに抗する穏健派ムスリムの動態や背景を理解することにより、チュニジアのみならず中東地域や欧州で行われている過激派による遺跡破壊やテロ行為の要因の分析と、その阻止につながり、同地域の安定化に寄与することである。

研究成果の概要(英文)：The aim of this project is to consider the dynamics of Islamic extremists and other Muslims from the case of the destruction and reconstruction of the saint's mausoleum in Tunisia after the 2011 Arab Spring.

Due to the inability to do field work in Tunisia because of Covid-19 and changing work environment, this topic was still issues in the empirical consideration using local data. However, this project brought theoretical results by considering the relationship between the destruction of the saint's mausoleum in Tunisia. Saint worship is a religious practice in which Muslims perceive and sensuously understand the symbols of Allah such as baraka and miracle through material objects and it is a meaningful practice in most Muslims except some Islamic extremists.

研究分野：中東地域研究、宗教人類学

キーワード：チュニジア 北アフリカ アラブの春 イスラームの人類学 聖者廟崇敬 モノの人類学

1. 研究開始当初の背景

2011年の中東における政変(アラブの春)から数年が経過し、他の中東諸国と比べてチュニジアは民主化を成し得た優等生と説明される事が多い。しかしながら、チュニジア国内では政変後にイスラーム過激派が急速に台頭し、イスラーム国に最も多くの外国人戦闘員を輩出し、国内においてもテロ行為や聖者廟の破壊行為が後を絶たない状況が続いた。過激派に傾倒するムスリムが増加した要因や、それに抗する穏健派ムスリムや世俗主義の動態を分析することは、チュニジアのみならず中東地域や欧州の平和にとっても喫緊の課題である。

政変後の民衆がサラフィー主義などの過激思想に急速に傾倒した要因について、先行研究では、貧困層・富裕層・農村・都市などの対立軸や、経済や教育の格差、失業問題などと関連付けた分析を行ってきた。しかしながら、個々のムスリムが何らかの契機や動機によって、流動的に特定の思想や主義に傾倒していることが指摘されており、個別具体的な事例を詳細に分析する必要性が指摘されている。そこで、本研究課題では、政変後のチュニジアにおいて、サラフィー主義者らによって破壊の対象となり、また同時に穏健派ムスリムによって再建がなされている、聖者廟をめぐるムスリムの動態に焦点をあてることとした。聖者廟という一つのモノや場所に対する思想や実践の相違について、文化人類学的な視座から調査を行うことで、先行研究の分析枠組とは異なる、現代チュニジアにおけるイスラームの動態の解明を試みた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、2011年の政変後のチュニジアにおいて台頭したイスラーム過激派と穏健派や世俗主義ムスリムの動態について、聖者廟の破壊と再建をめぐる事例から考察することにある。具体的には、サラフィー主義者たちが、どのような思想のもとで何を破壊しようとしてきたかを分析するとともに、穏健派ムスリムや世俗主義者らによって聖者廟の再建がどのようになされ、聖者廟をめぐる宗教実践において、何が求められているかを明らかにすることを、本研究課題の目的とした。

政変後のチュニジアにおける聖者廟という一つのモノ・場所をめぐるイスラーム過激派とそれに対峙する世俗主義や穏健派ムスリムという異なるムスリムの動態を明らかにすることで、中東地域、イスラーム世界における過激派と、それに抗するムスリムについて理解を深めることで、現代的課題の解決に寄与することを目指した。

3. 研究の方法

本研究課題は、アラブの春の政変以降のイスラーム過激派の台頭についての先行研究の分析、モノや場所への関わり方に関するイスラームの理論的研究、文化人類学的手法を用いた聞き取り調査と参与観察によるフィールドデータの収集、現地で購入した新聞・雑誌記事などの一次資料の分析、といった異なる研究方法を統合し、学際的な地域研究の手法を用いることを計画していた。研究期間の前半においては、先行研究分析と理論研究の精査を集中的に行うことで議論の骨子を策定し、中盤以降はフィールド調査と現地一次資料の分析を中心に行い、それらのデータを先行研究や理論研究とつなげることで、考察を深化させる予定であった。

しかしながら、後半期間は想定していた研究計画を実施できなかった。その理由の一つとして、研究期間の5年間(2年間延長)において、本務先が2回変わり、教育や学務に想定外のエフォートを割かれ、当初の計画通りの現地調査や文献収集を実施することが叶わなかったことがあげられる。加えて、後半期間は新型コロナウイルス感染症の影響で、渡航ができなかったことも、フィールド調査や現地資料の収集を不可能にさせた。日本国内で収集できる資料や、インターネット上での記事・情報収集を行うことで、現地調査を補ったが、文化人類学的な調査をデータ収集の基本としていたため、大きな研究計画の変更を余儀なくされた。

4. 研究成果

上述した理由により、フィールド調査や現地資料を用いた実証的な考察においては課題が残った反面、チュニジアの聖者廟破壊の事例をイスラーム地域研究や宗教人類学の先行研究の議論において考察することで、理論的な考察においては研究成果をもたらしたと考える。

具体的には、まず聖者廟破壊の事例をイスラームの人類学や、モノをめぐる人類学の議論のなかで検討した。研究期間の前半期に、人類学をディシプリンとしてイスラームを対象にしている若手研究者らと「イスラームの人類学勉強会」を組織化し、定期的に先行研究について議論する会を催した。このことにより、タラル・アサド以降のイスラームの人類学の議論において、モノと宗教実践の関わりについて注視することが、イスラームの宗教実践の特徴を考察する際に新たな視座となり、その理解の深化につながることを考察した。

イスラームの宗教実践においてモノに注視することは、イスラームの伝統における法学などの外面を重視するザーヒルの志向性と、内面的な修行を重視するバーティンの志向性の二項が顕著に示される行為であると分析できる。聖者廟に関する実践は、イブン・タイミーヤの思想的系譜において、墓を高くしたり白くしたりするなどといった行為が批判の対象になり、現代にお

いてもその思想がサラフィー主義者などから支持され、各地の聖者廟破壊につながっている。一方で、聖者の存在はクルアーンにもみとめられ、チュニジアのみならずイスラーム世界各地で聖者廟が祀られ、参詣の対象となってきた。チュニジア国内の聖者廟の破壊に対する市民の反応についての調査によると、大多数のチュニジア国民は、早急に破壊された聖者廟を再建すべきと回答していることが明らかになっている。また再建費用を募る市民団体も存在し、一部のイスラーム過激派を除き、聖者廟崇敬は支持を得ている実践と理解できる。それらの聖者廟崇敬を分析すると、墓のみならず、樹木や巨岩、井戸水など、その空間を構成するさまざまなモノがその実践に関わっていることが理解できる。

それらの実践は、聖者たるゆえんとして着目されてきた恩寵や奇蹟の概念を、モノを通じてムスリムが体感的・感覚的に感得していると考察できる。イスラームはクルアーンという神の言葉の理解を宗教実践の中心に据えた一方で、一部のイスラーム過激派を除いたほとんどのムスリムは、何かしらのモノを通じてその言葉を感得する機会を得ていると考えられる。字義による宗教実践をザーヒル的なイスラームの側面と理解するならば、モノを通じた宗教実践というパーティシパトリーな宗教実践が、現代チュニジア社会においても、穏健派ムスリムや世俗主義のなかに根付いていることが明らかになった。

イスラームは厳格な一神教である、偶像崇拜を忌避する、といった理解が存在する一方で、特定のモノに神の顕現をみとめる汎神論的な理解や、多神教的な側面があることが、チュニジアの聖者廟をめぐる実践からも理解できる。本研究課題で注視した事例は、現代中東社会の課題解決のためのみならず、イスラームの理解や、一神教/多神教といった宗教の理解の深化においても、意義深い研究成果になったといえる。

一方で、先述のような不測の事態によって、サラフィー主義者や穏健派ムスリムに対して、非構造化インタビューや参与観察を行うことはできず、その動機や思想の背景を綿密に分析することは叶わなかった。個々のムスリムの声をデータに活かすという点では課題が残ったといえよう。

フィールド調査が実施できず、実証的な考察において課題が残ったものの、前半期に得たデータや日本国内で得られた情報を、先行研究やイスラームの理論研究と結びつけた研究成果を積極的に公表できた。例えば、スペイン・セビージャで行われた第5回世界中東研究大会(WOCMES 2018)でのパネル、ソウルで行われた韓国中東学会国際会議(KAMES 2018)、イラン・テヘランで行われた国際会議(Symposium of Perspective on Material Culture and Middle Eastern Turn)などで発表したこと、またそれらの議論をもとに、学術雑誌『イスラーム世界研究』に英語による特集号を組んだことは、研究成果の国際的発信に貢献できたといえる。また、日本語においては、一般読者向けの著書を、共編著で1本、章分担で3本執筆したことも、研究成果の社会的還元として成果をもたらしたといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 二ツ山達朗	4. 巻 45
2. 論文標題 クルアーン装飾具の飾りめぐり	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 季刊民族学	6. 最初と最後の頁 88-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 FUTATSUYAMA, Tatsuro	4. 巻 13
2. 論文標題 <Special Feature "Holy Relics and Religious Commodities in Islam">Editor's Preface	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 イスラーム世界研究 : Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/250318	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 FUTATSUYAMA, Tatsuro	4. 巻 13
2. 論文標題 <Special Feature "Holy Relics and Religious Commodities in Islam"> Thinking Islam Through Things: From the Viewpoint of Materiality of the Qur'an	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 イスラーム世界研究 : Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies	6. 最初と最後の頁 69-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/250324	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 二ツ山達朗	4. 巻 44
2. 論文標題 「嫉妬にはきつと尻尾が効く」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 月刊みんばく	6. 最初と最後の頁 9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 FUTATSUYAMA, Tatsuro	4. 巻 1
2. 論文標題 Diversity of Olive Culture in Mediterranean: From the Case of Tunisian Traditional Olive Oil	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The Civilizational Exchange in the Mediterranean	6. 最初と最後の頁 405-428
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 二ツ山達朗
2. 発表標題 SNSを媒体としたクルアーンがもたらすイスラーム的コネクティビティの変容
3. 学会等名 イスラーム信頼学全体集会「信頼学のレシピ～素材と方法編～」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 二ツ山達朗
2. 発表標題 神とムスリムを介する聖者・聖遺物・聖木：チュニジアの事例から
3. 学会等名 上智大学研究機構イスラーム研究センター主催連続講演会「イスラームおよびキリスト教における崇敬の人類学：一神教の聖者たち、聖人たち」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 二ツ山達朗
2. 発表標題 「クルアーンが記されたモノはどこへ行くのか？：チュニジア南部における室内装飾具の事例から」
3. 学会等名 日本中東学会第35回年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 FUTATSUYAMA, Tatsuro
2. 発表標題 Rethinking Islam through Commodities: Focusing on Ordinary Muslims' Space in Tunisia
3. 学会等名 Symposium of Perspective on Material Culture and Middle Eastern Turn, at Iran National Museum (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 二ツ山達朗
2. 発表標題 クルアーンを視覚化するメディア チュニジア南部における5年間の変化に着目して
3. 学会等名 NIHU「現代中東地域研究」若手公募研究「アラブ世界における近代的メディアとイスラーム」第7回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 二ツ山達朗
2. 発表標題 ムスリムの日常空間におけるクルアーンの物質化 チュニジアにおける室内装飾具の事例からー
3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究「モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 FUTATSUYAMA, Tatsuro
2. 発表標題 How Qur'an are Materialized in Spaces of Muslims under Mass Production and Consumer Society: From the case of South Tunisia
3. 学会等名 Korean Association for Middle East Studies, at Hankuk University of Foreign Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 FUTATSUYAMA, Tatsuro
2. 発表標題 Qur'anic Commodities in Spaces of Ordinary Muslims: Focusing on Interior Ornaments and Calendars in Tunisia
3. 学会等名 World Congress for Middle Eastern Studies, Spain Sevilla university (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 二ツ山達朗
2. 発表標題 チュニジア南東部におけるオリーブ信仰 宗教人類学において物質を扱う一考察
3. 学会等名 日本文化人類学会第50回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 FUTATSUYAMA, Tatsuro
2. 発表標題 Qur'anic Interior Ornaments in Ordinary Muslims' Space: From the case of South Tunisia
3. 学会等名 SIAS/KIAS-CNRS Joint Seminar "Holy Relics and Religious Commodities in Islam" (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 二ツ山達朗
2. 発表標題 クルアーンをめぐる物質文化ー室内装飾具の事例から
3. 学会等名 人間文化研究機構「現代中東地域研究」ミニシンポジウム「多元的資源観からみる現代中東」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 FUTATSUYAMA, Tatsuro
2. 発表標題 Traditional Cultures of Olive Oil in Modern Global Market: From the Case of South Tunisia
3. 学会等名 Tunisia-Japan Symposium on Science, Society and Technology (TJASST 2017) (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 西尾哲夫、東長靖	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 392 (うち130-139頁担当)
3. 書名 中東・イスラーム世界への30の扉 (第12章130-139頁担当)	

1. 著者名 赤堀雅幸編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 上智大学イスラーム研究センター	5. 総ページ数 108 (うち37-52頁担当)
3. 書名 イスラームおよびキリスト教における崇敬の人類学：一神教の聖者たち、聖人たち (第3章37-52頁担当)	

1. 著者名 千葉悠志、安田慎	4. 発行年 2021年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 250 (うち145-164頁担当)
3. 書名 現代中東における宗教・メディア・ネットワーク (第6章、145-164頁担当)	

1. 著者名 鈴木 董、近藤 二郎、赤堀 雅幸	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 826 (うち159、202-203、208-209、 686-687、690-691、頁分担)
3. 書名 中東・オリエント文化事典(分担項目「パトロンとクライアント」「寄付と喜捨」「マグリブ オリーブとオリーブオイル」「マグリブ 主食(クスクス)」「天使」)	

1. 著者名 日本沙漠学会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 534 (うち54-55頁分担)
3. 書名 沙漠学事典(分担項目「アフリカの砂漠サハラ砂漠」)	

1. 著者名 小杉 泰、黒田 賢治、二ツ山 達朗	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 288
3. 書名 大学生・社会人のためのイスラーム講座	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------